社会技術研究開発事業

令和６年度研究開発実施報告書

科学技術の倫理的・法制度的・社会的課題（ELSI）への
包括的実践研究開発プログラム
「医療・ヘルスケア領域におけるELSI の歴史的分析と
アーカイブズ構築」

後藤基行
（立命館大学大学院先端総合学術研究科　准教授）

目次

１．研究開発プロジェクト名 2
２．研究開発実施の具体的内 2
２‐１．研究開発目標 2
２‐２．実施内容・結果 3
２‐２．実施内容・結果 19
３．研究開発成果の活用・展開に向けた状況 20
４．研究開発実施体制 21
５．研究開発実施者 22
６．研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など 25
６－１．シンポジウム等 25
６－２．社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など 26
６－３．論文発表 27
６－４．口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表） 29
６－５．新聞／TV 報道・投稿、受賞等 30
６－６．知財出願 31

１．研究開発プロジェクト名

医療・ヘルスケア領域における ELSI の歴史的分析とアーカイブズ構築

２．研究開発実施の具体的内

２－１．研究開発目標

（A）.【ヘルスケアアーカイブズに基づく ELSI 研究】

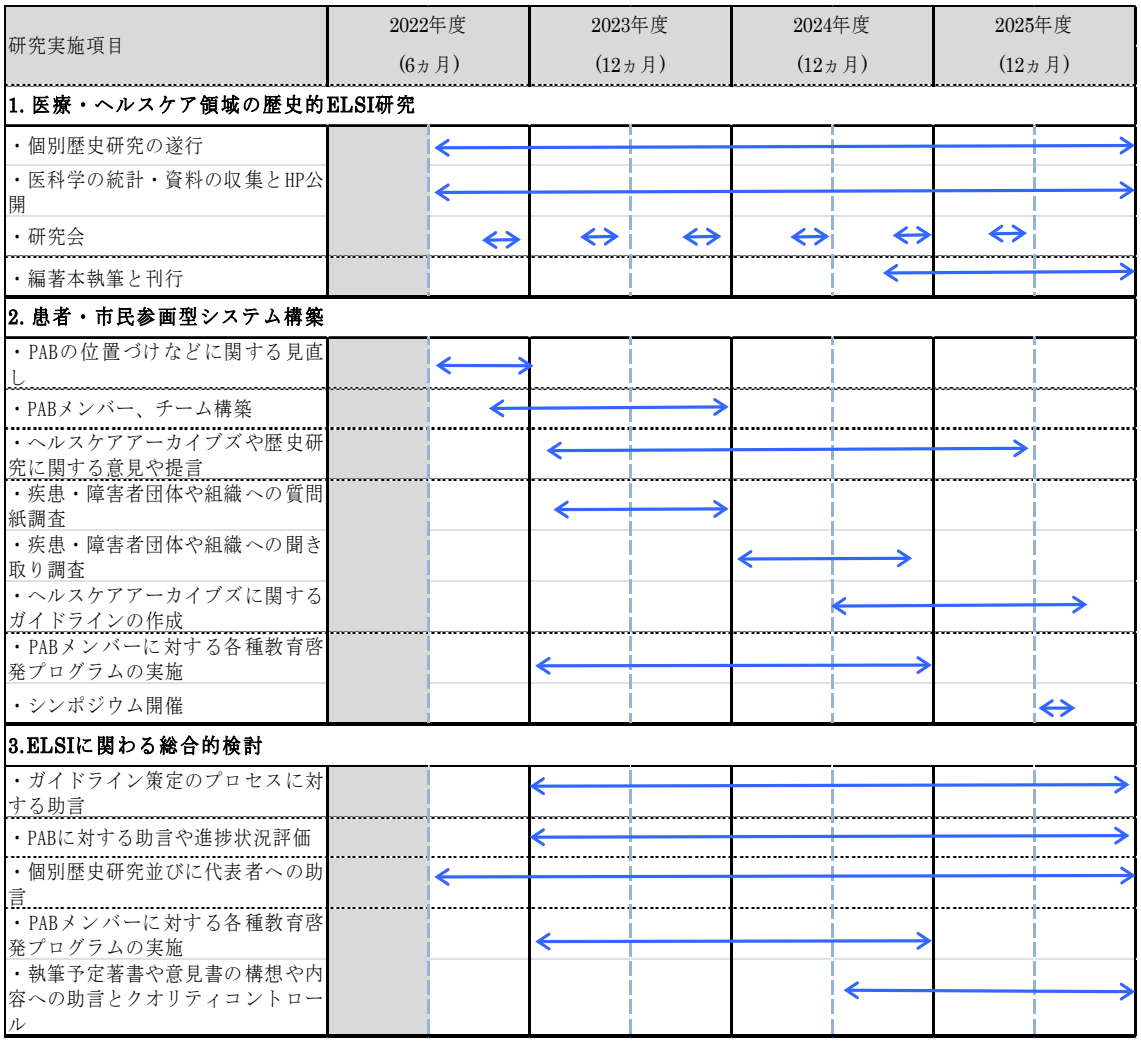
医科学は研究と臨床という２つの実践をもち、特に研究段階から臨床への応用過程にはトランスサイエンス的事象が起こり、その結果として今日でいうところの「ELSI」（「原 ELSI」）が歴史的に多く生じてきたと考えられるが、十分な実証研究は行われてこなかった。よって、日本の医科学の歴史の中でいかなるトランスサイエンス問題と ELSI が生じてきたか、患者・市民参画（PPI/E）の上で、一次資料たるヘルスケアアーカイブズに基づきながら、医学史・科学史研究、医療社会学、科学技術社会論を専門とする研究グループを結合したイニシアティブにより明らかすることを第一の目標とし、関連の編著を刊行する。また、この研究における一次資料および関連二次資料の収集を通じて、医科学の ELSI で欠落していた政策評価・策定にも資する歴史的なエビデンスを提供するヘルスケアアーカイブズを構築する。

（B）．【提言や課題解決を可能とする患者・市民参画（PPI/E）型システム】

（A）の研究の遂行過程において研究者以外にも参画する患者・当事者・市民などのマルチステークホルダーとの関係を一時的なものにするのではなく、より長期的な集合体組織として継続させ、医科学にかかわる ELSI について、歴史的知見を踏まえて評価・提言が可能なタレントプールとしていくことを目標とする。将来的にはこのタレントプール内に教育・研修機能を実装することで、先端医療研究を含むヘルスケア全般の問題と ELSI にも対応するシステムとしていく。個別の目標としては、研究の成果を協働しながら生成すること、そして保存や公開の仕組みが整っていないヘルスケアアーカイブズの問題について医療機関や患者・家族の視点を組み込んだ実効的なガイドラインを提言することなどである。また、これら各個のプロジェクト遂行において、俯瞰的・総合的見地から、どのような知見が ELSI として見出せるか≪ELSI に関わる総合的検討≫を随時行い、全体的なクオリティコントロールと同時に、研究プロジェクトがもつ倫理的側面の評価も行う。こうした活動を通じて、アーカイブズのみならず、ヘルスケア領域全般の ELSI の現代的課題にも対応する実践的協業体制システムへ発展させることそのものも研究開発目標とする。

２－２．実施内容・結果

（１）スケジュール



（２）各実施内容

■項目１：≪医療・ヘルスケア領域の歴史的 ELSI 研究グループ≫（歴史研究 G）

本提案では、（1）対象とする資料収集の遂行、アーカイブズ構築、HP での公開、（2）個別研究の遂行、（3）：患者・市民アドバイザリーボード（Patient and Public Advisory Board：PAB）とのワークショップにおいて議論の対象とする資料の選定、患者・当事者・市民からの意見や批判の吟味と自身の研究へのフィードバックの検討を目指している。「医療・ヘルスケア領域の歴史的 ELSI 研究グループ」（以下、歴史研究 G）が中心になり主にそれぞれ以下のことを実施した。

実施項目：（1）対象とする資料収集の遂行、アーカイブズ構築、HP での公開

本プロジェクトでは、「医療・ヘルスケア領域の歴史的 ELSI」のエビデンスを構成する一次資料を収集し、ウェブ上と、立命館大学内に紙資料群として保存し、アーカイブズ構築を重要な目的の一つとしている。

実施内容：医療ヘルスケアに関わる歴史的 ELSI に関係する資料の収集を行った。

→実施体制：立命館大学プロジェクト室（後藤）、および各研究実施者

→実施内容①：精神衛生法期における強制入院に関わる公文書（立命館大学）の他、各研究実施者の領域の資料の収集

→実施内容②：収集資料の立命館大学プロジェクト室での紙資料の保存管理を通じた物理的なアーカイブ整備と、それらのデジタル化を通じたオンライン上でのアーカイブズ構築

→実施内容③：②で実施したデジタル化済み資料の一部ウェブ（「医療・ヘルスケア政策データアーカイブ」）公開

実施項目：（2）個別研究の遂行

歴史研究 G は、アーカイブズに基づく医療・ヘルスケア領域の歴史的 ELSI についてのプロパー研究を、全期間通じ遂行することを目的とする。各研究者はアーカイブズ収集とともに個別研究を遂行した。

実施項目：（3）PAB とのワークショップにおいて議論の対象とする資料の選定、患者・当事者・市民からの意見や批判の吟味と自身の研究へのフィードバックの検討

本プロジェクトでは、PPI（患者・市民参画）を通じた研究遂行を重要な方法及び目的自体の一つとしている。PPI を経た協働作業を行っていくことで、ヘルスケア領域全般の ELSI の現代的課題にも対応する実践的協業体制システムへ発展させる基盤づくりを継続して行った。議論の対象とする一次資料を選定し、これに基づいて行われたワークショップの議論から、研究に還元されるものがありうるのか検討した。

【患者・市民参加型ワークショップ】

医科学の歴史における ELSI：ハンセン病療養所に関わる一次資料の検討

日時：2024 年 12 月 8 日（日）9:30-12:30

会場：オンライン

医科学の歴史における ELSI：優生保護法に関わる一次資料の検討

日時：2025 年 2 月 16 日（日）13：00～16：00
会場：立命館大学大阪いばらきキャンパス・B 棟 3 階「コロキウム」

■項目 2：≪患者・市民参画型システム構築グループ≫（PPIG）

本提案では、ヘルスケアアーカイブズに基づく医科学における ELSI の検討やアーカイブズの保存や管理に関する議論をはじめ、各種提言や課題解決を可能とする患者・当事者・市民・人文社会科学者などのマルチステークホルダーの集合体の構築を目指している。本課題の「患者・市民参画型システム構築グループ」（以下、PPIG）が中心となり、前年度に引き続いて調査研究と PPI の実装を行ってきた。

恒常的な活動として、毎月 1 回 PPI グループの定例 MT を開催し、総合的検討グループのメンバーも随時参加して助言を受けながら、調査や PAB の運営について研究実施を進めてきた。

実施項目：（1）PAB（患者・市民アドバイザリーボード）を通じた ELSI 課題の検討と提言

当初計画→歴史研究 G と連携して対話型ワークショップを開催し、個別研究の ELSI 課題について研究者が PAB メンバーからの助言を受ける場を設ける。
達成状況→ 100%

実施内容：

① PAB（患者・市民アドバイザリーボード）の運営

PAB 委員の選定にあたっては、公募枠と推薦枠をそれぞれ設けた。公募枠の募集は、2023 年 10 月に募集要項を生存学 HP にて公開し、一般公募した。図書館や文書館、教育行政やジャーナリストの業界団体にも案内を送付した。書類選考を経て、オンライン面接で選考を行った。選考委員は PPI グループメンバーから 3 名が参加し、協議の上で選考を行なった。

推薦枠については、後藤班のオブザーバー4 団体に説明の上、団体から 1 名ずつ推薦を頂いた。なおオブザーバーには難病の団体が含まれていなかったため、難病領域の患者団体資料のアーカイブズ化実績のある 1 団体を新たに加えることとし、団体に事前に個別説明の上参加の了承を得た。

後藤班　PAB 委員（8 名：公募 3, 推薦 5）

②　患者・市民参画型ワークショップの企画運営

R5 年度は教育研修を計 4 回実施した上で、年度末に 1 回歴史研究グループとの合同で対話型ワークショップを対面で実施した。R6 年度は、R5 年度に引き続き、歴史研究グループと連携した対話型ワークショップを 2 回（オンライン 1 回、対面 1 回）開催した。

患者・市民と ELSI の観点を議論するためのワークショップの設計の検討においては、熟議型世論調査(Fishkin et al. 2000）における deliberative opinion polling を理論的な参考としつつ、実行可能な形かつ本研究に適した形での患者・市民参加型ワークショップの設計を検討した。具体的には、ヘルスケアに関する歴史的な一次資料を直接手に取って参照し、患者・市民自身の経験から生活者として ELSI の観点を述べてもらい、歴史 G の研究者は患者・市民の意見から得られた知見についてフィードバックする形式とした。対象の資料を研究している専門家が情報提供を行なった後、事前に研修を受けたファシリテーター1 名が進行役を務め、少人数のグループワークで議論する。障害や疾患への配慮として、視覚障害の参加者には情報保障と資料のテキスト化を提供している。

【患者・市民参加型ワークショップ（1）：ハンセン病療養所に関する一次資料の検討】

日時：2024 年 12 月 8 日（日）9:30-12:30
会場：オンライン
参加者人数：PAB 委員 8 名、後藤班メンバー13 名、学生スタッフ 2 名、計 23 名
プログラム：
◆第 1 部 研究者からの情報提供
ハンセン病療養所における「未感染児童」について
松岡 弘之（岡山大学文学部）

◆質疑応答
◆グループワーク
A～C 班に分かれてディスカッション
◆休憩
◆全体共有、松岡先生からのフィードバック
使用した一時資料：
国立療養所長島愛生園，「保育児童社会復帰記念感謝会」
＊1955 年 12 月に行われた長島愛生関係者の座談会の記録

◆研究者から提案されたディスカッションのテーマ

未感染児童の周囲の大人たちの様子、あり方についてどう感じたか

- 他の医療や障害の分野から、ハンセン病について考えるときに参考になりそうなことはどんなことか
- 70 年前の今日の記録について、研究者や市民が利活用する際にどのような配慮が必要か

◆WS を通じて PAB 委員が議論した論点

A～C 班（Zoom のブレイクアウトルーム）の 3 班の討議の音声記録から逐語録を作成し、会話の中で表出されている論点を参加者個人ごとに抽出した。その上で、個人ごとの論点の一覧表をもとに、議論された内容を分析した。また、当日の論点一覧をもとに、担当した研究者はフィードバックシートを作成した。

〈PAB 委員から出た主な論点〉

- 隔離政策の只中で、子どもたちの行く末を関係者が真摯に考えて努力していたことが垣間見える。むしろ、地域における住民からの厳しい差別が存在することを感じた。
- このような子どもたちの存在を初めて知った。隔離収容について考慮する時、その家族や子どもの存在はほとんど顧みられていないと思う。
- 子どもたちの記録について、どこまで公開するべきなのかは悩ましい。子どもに関係する居住地や疾患名などは配慮が必要だと感じる。

〈歴史研究 G の研究者（松岡弘之）からのフィードバックシート〉

国の誤ったハンセン病政策は患者本人のみならずその家族におよぶものであった。療養所内外における患者本人の処遇などを中心的な論点としてきたハンセン病問題において、患者の家族の問題の解明は、訴訟を通じて被害の側面は明らかにされてきたとはいえ、その全体像についての学術的検討は道半ばにある。当日、参加者の方々から実際に意見を伺い、問題を多面的に捉えるための視点を増やす必要性を感じた。今回の療養所

内で養育された児童にそくしていえば、「解決」に向けた組織や行政や地域社会がそれぞれに制約を抱えるなかで、療養所外の児童養護施設に引取らせることが当時は「解決」とされた。だが、その共通の目標の設定過程や、その実現過程での公衆衛生・教育・社会生活など関係者の利害関係が複雑に絡まるなかで、同時代の研究水準と社会一般での理解との間に乖離が存在し、さまざまなあつれきを招いていた。その全体像について、場面ごとに丹念な分析や提示が重要なのであり、ワークショップも断片的な情報の提示に留まらざるをえないが、その背景を想像できるよう資料提示する側の工夫や、利用制限の考え方にも差別を再生産させないような充分な配慮が必要であることを改めて感じた。

【患者・市民参加型ワークショップ（2）：優生保護法に関わる一次資料の検討】

日時：2025 年 2 月 16 日（日）13:00-16:00

会場：立命館大学大阪いばらきキャンパス（対面・オンラインハイブリッド形式）

参加者人数：PAB 委員 7 名、後藤班メンバー 14 名、学生スタッフ 6 名、オブザーバー3 名、計 30 名（現地 25, オンライン 5）

プログラム：

◆第 1 部　研究者からの情報提供

R6 年度の活動について　後藤基行

調査結果に関する報告　渡部沙織

◆休憩

◆第 2 部　ワークショップ

優生保護審査会について　松原洋子

◆グループワーク

使用した一時資料：

山口県優生保護審査会議事録　2 点

①昭和 44 年 12 月 10 日（水）

②昭和 45 年 6 月 22 日（月）

◆WS を通じて PAB 委員が議論した論点

A～D 班（うち、D 班は Zoom のブレイクアウトルーム）の 4 班の討議の音声記録から逐語録を作成し、会話の中で表出されている論点を参加者個人ごとに抽出した。個人ごとの論点の一覧表をもとに、議論された内容を分析した。また、当日の論点一覧をもとに、担当した研究者はフィードバックシートを作成した。

〈PAB 委員から出た主な論点〉

- 優生保護法に規定されている遺伝性疾患の優生手術はこの時期にはほぼ行われておらず、ほとんどが 12 条、精神障害や知的障害の方に対して手術が行われており、実態は障がい者差別であったことが資料を通じてよく理解できた。
- この時期になると、人権意識や制度的限界を委員自身が感じている部分も垣間見えるが、最終的には議事の進行の中で機械的に進められてしまう。
- 黒塗りが多すぎる。当事者への配慮を名目にしていることは、理解はできるが、ここまで黒塗りが多いと実情の研究が進まない。

〈歴史研究 G の研究者（松原洋子）からのフィードバックシート〉

今回は、Y 県の優生保護審査会の議事録を検討した。グループワークで共有された主な論点は、以下の三点である。

第一に、審議の進め方およびその内容についてである。本人の同意なく不妊手術を実施するか否かを決定する重要な審査であるにもかかわらず、その審議が時間的にも内容的にも不十分であったとの指摘が多く見られた。特に、未成年が審査対象とされていたこと、

女性への申請が多かったこと、さらには当時の人権意識の欠如が問題視された。第二に、審査員の専門性と採否の関係が挙げられる。審査員が疑問を抱きながらも申請医師の判断が優先されていたこと、当時の人類遺伝学に関する知識との乖離、医師以外の委員の役割に関する疑問、そして審査員間で判断基準が統一されていなかった点などが論点となった。第三に、情報開示の在り方についてである。文書のマスキング（黒塗り）対象やその分量の妥当性、都道府県ごとに異なる開示範囲の問題などが課題として挙げられた。

グループワークに先立って優生保護審査会に関する解説が行われたことにより、参加者の間で事実認識に著しい齟齬は生じなかった。このことから、一次資料の読解にあたっては、関連する基本知識を事前に共有することが有効であることが確認された。グループワークで指摘された論点は強制不妊手術の ELSI を検討するうえで、いずれも重要なものであった。ただし、これらの指摘には事実に対する参加者それぞれの独自の解釈が反映されている。視点の複数性を ELSI に関する高次の知見として統合していくためには、司法・行政・立法が関与した優生保護法下での強制不妊政策の特徴について、歴史的かつ理論的な整理と検討が不可欠である。そこから得られた知見を PAB において共有し、さらに議論を重ねることで知見をブラッシュアップすることが求められる。

実施項目：（2）ヘルスケアアーカイブズ構築の ELSI 課題に関する調査

当初計画→ 一般市民を対象として、インターネット質問紙意識調査を実施する。また、一般市民と患者・家族の結果を比較して分析するための FGI（フォーカスグループインタビュー）調査を企画・設計する。
達成状況→ 90%

実施内容：

① 一般市民を対象としたインターネット質問紙調査

- 方法
  - インターネット上の質問紙を用いたアンケート調査
- 実施期間
  - 2024 年 11 月 6 日～8 日
- 調査対象
  - インテージ社のマイティモニター登録者の 20 歳～69 歳の男女に一定の条件のもとで回答を依頼
  - 除外職種：マスコミ、広告、シンクタンクなど調査を多く行っている職種および医療・福祉に関連する職種
  - 日本の自然人口の性別・年齢・都道府県の人口構成比に可能な限り合わせた対象に依頼
- 回答率
  - 依頼数 N=10,950,有効回答数 N=1,143、回答率 10.4%
  - 有効回答者が回答に要した時間の平均は 9.2 分
- PPI
  - ウェブ上に構築した質問票サンプルについて、PAB 委員からレビューを受け、意見を改良の参考とした

回答者の属性一覧

質問票の構成

- アーカイブズに関する認知度
- 医療・福祉の資料の保存に関する考え
- 医療・福祉の資料の利活用に関する考え
- 医療・福祉の資料を研究に利活用することのリスク・ベネフィットに関する認識

結果

（1）アーカイブズの認知度

「アーカイブズ」の概念について文書と写真で説明を行った後、認知の有無を尋ねた。

- 全体では 54.6%がアーカイブズを知っていたが、意味を正確に理解していなかったと回答した人の割合が高い。
- 性年代別では、若年層、特に女性の 20 代の認知度が低い（29.9%）。「意味を理解した上で知っていた」割合が最も多かったのは 60 代男性（27.2%）。
- 男女ともに、年齢が上がるほど認知度が高くなる傾向があるが、意味を理解している人の割合は微増に留まる。

性別		合計	用語の意味を理解した上で知っていた	用語を聞いたことはあるが、意味は理解していなかった	知らなかった
男性	N	570	120	201	249
	%	100	21.1	35.3	43.7
女性	N	573	87	216	270
	%	100	15.2	37.7	47.1
全体	N	1,143	207	417	519
	%	100	18.1	36.5	45.4

（2）**医療・福祉に関する記録の保存の必要性とその期間に関する認識**

- 保存を肯定する割合は全体で 86.8%にのぼる。
- 保存するべきでないと回答した 13.2%にその理由について尋ねたところ、プライバシーの懸念や利活用の目的に対する懸念が高い割合で選択された。
- 保管の期限については、「10 年」を選択した割合が最も高く「50 年」が次ぐ。「150 年」を選択した人が 0.3%に満たないのに対して、「永久的保存」を 18.4%が選択している事をどのように解釈するべきか？
-

（3）**医療・福祉に関する記録を保管する場所**

- 記録を保存するのに望ましい場所について、最も多く選択されたのは「作成元の機関」だった。市民が抱く医療機関に対する信頼度の高さが窺える。
- 大学や NPO、民間団体などはセンシティブな記録を保管する機関として一般市民に積極的に支持されていない可能性が示唆される。
-

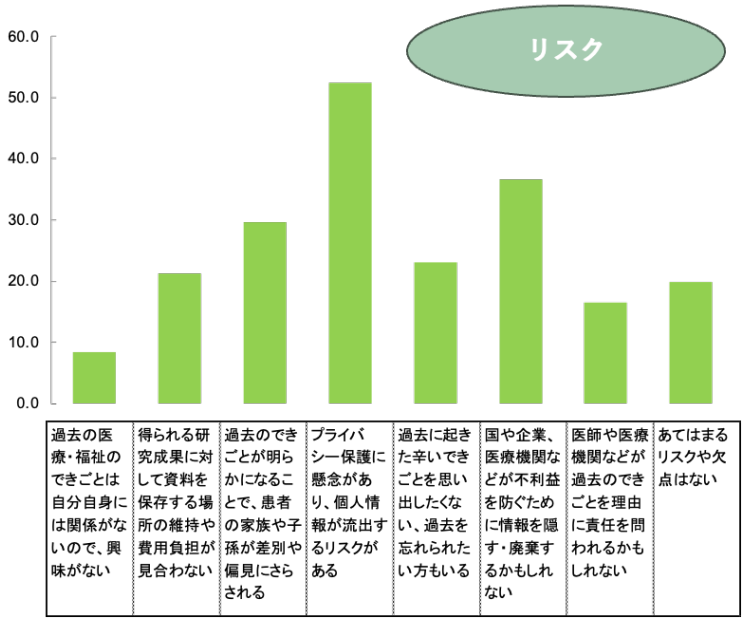
（3）**自身が含まれる過去記録の利活用への許容度**

- 自身の記録が含まれる場合の研究利活用への許容度は、「個情報なし」や「祖先」に比べてやや低くなる傾向がある。
- 自分自身と直接的な関係がない病床統計や医療施設の記録等はアーカイブズ化と利活用に理解を得やすいかもしれないが、アーカイブズに自身や祖先が含まれる際の人々の微妙な抵抗感の上昇に配慮する必要性がある。

（4）**利活用の目的**

- 医学系研究に比較して、他の目的への許容度は相対的に低くなる。
- 人文系研究への利活用に抵抗感を感じる人が一定割合存在することについて、理解を得るために様々な対話の努力が必要となる。
- 市民調査や報道への利活用には強い抵抗感が存在する。

（5）医療・福祉に関する過去の資料を利活用して研究を行う事のリスク・ベネフィット



② FGI(フォーカスグループインタビュー)の設計検討

意識調査の結果を参考にしながら、過去の医療・福祉に関する情報の保存と利活用について、一般市民と患者・家族を対象に、質問紙調査の結果分析とも併せて懸念と期待について FGI 調査を最終年度に実施する予定となっている。

R6 年度は、FGI の設計について PPI グループの定例 MT で検討し、倫理審査申請や委託業者の選定などの準備作業を実施した。

実施項目：（3）ヘルスケアアーカイブズに必要な倫理的配慮の方向性の検討

当初計画→ 意識調査と FGI から抽出された課題と患者・市民参画で議論されてきた課題を基にして、ヘルスケアアーカイブズに必要な倫理的配慮について素案の方向性を検討する。

達成状況→ 90%

実施内容：

① 医療・ヘルスケアアーカイブズのあり方に関する意見交換会

- 日時：2024 年 9 月 28 日（土） 13:00～15:00
  開催方法：ハイブリッド方式（Zoom によるオンライン＆立命館大でのオンサイト）

- オンサイト会場：立命館大学朱雀キャンパス 3 階 307 教室
- 参加者：後藤班メンバー
- プログラム
    - 開会あいさつ・趣旨説明　後藤基行（立命館大学大学院先端総合学術研究科）ゲストによる話題提供①　井上悠輔（京都大学大学院医学研究科）「少し前の医療記録・コミュニティ資料をめぐる研究倫理」
    - 班員による話題提供②　赤司友徳（九州大学・大学文書館）「九州大学大学文書館における医療記録の公開に関する試論」
    - 休憩
    - ゲスト＆後藤班員の意見交換会
    - ふりかえり・閉会あいさつ

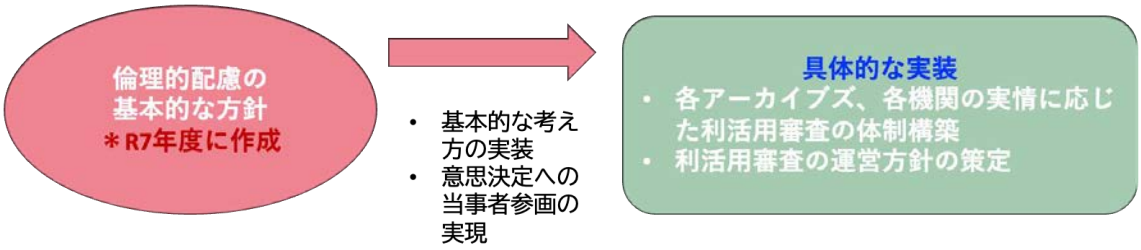
〈意見交換会での論点〉

- 井上悠輔（京都大学）氏は、患者情報の利活用と同意の限界について報告した。スウェーデンのギルバーク裁判やイギリスの NHS などの事例を紹介しながら、グループ・ハームやアイヌ民族の研究倫理指針策定の経緯なども踏まえて、公的な情報基盤を整備する上での留意点が提起された。
- 本 PJ 班員の赤司友徳（九州大学）氏から診療記録を公開している福岡共同公文書館や大阪大学アーカイブズの事例を検討した上で、今後の診療記録の公開方針について試案が示された。
- デジタル時代における「忘れられる権利」や、史料ごとの「当事者」定義の難しさなど、記録を公開管理する上での様々な論点が提示された。
- 歴史的資料の利活用にどのような倫理的配慮が必要なのか、班員間でのコンセンサスの醸成の機会となった。

② 倫理的配慮に必要な基本方針の検討

最終年度は、アーカイブズの利活用の倫理的配慮に必要な基本方針について、PAB 委員と協働して策定を進める予定である。PAB 委員と協働して、素案の内容について意見交換会を複数回実施して改訂する。最終的に、文書として研究グループの Web サイトに公表する。

R6 年度は、素案の構成と策定のプロセスについて PPI グループ内で検討を行った。



■項目３：≪ELSI に関わる総合的検討グループ≫（総合的検討 G）

実施項目： 「ELSI に関わる総合的検討グループ」（以下、総合的検討 G）は、歴史研究 G、PPIG が遂行するすべての研究開発項目に対して、それぞれの専門的知見をもって助言、クオリティコントロールを行う立場である。特に、本研究プロジェクトが様々な患者・家族・当事者との協働を行うことから、その倫理的配慮に留意し、代表らをサポートする。総合的検討 G は、PPIG と歴史研究 G の定例ミーティングに随時参加し、適宜直接事業の内容に対して助言を行ってきた。また、質問票や文書へのレビューや、PAB 委員に対する教育研修プログラムへの知見の提供などを行い、本課題が目指す公共的な医療福祉アーカイブズの構築と患者・市民参画の実現に資するためにクオリティコントロールを担った。

実施内容：PAB メンバーに対する各種教育啓発プログラムの実施

本プロジェクトの独創性と意義を支えている PAB 体制が十全に機能するように、本プロジェクトや PPI について PAB メンバーに対して教育研修を PPIG が中心となって企画運営を行ったが、総合的検討 G からは運営方法や内容に対する助言を行うとともに、松原と藤田がそれぞれ研修の講師として参加した。具体的には以下である。

・2024 年 9 月 28 日（R6 年度第 1 回全体班会議）

井上悠輔（京都大学大学院医学研究科）「医療・ヘルスケアアーカイブズのあり方に関する意見交換会」―少し前の医療記録・コミュニティ資料をめぐる研究倫理」

赤司友徳（九州大学大学文書館）「九州大学大学文書館における医療アーカイブズの公開に関する試論」

実施内容：歴史研究 G、PPIG の活動のクオリティコントロール

ELSI の観点を踏まえたアーカイブズの公共化、研究に資するよう、助言とアセスメントを行ってきた。PPIG の当事者も含む非研究者とのコミュニケーションのあり方や調査方法などについてアドバイスを行うことで、本プロジェクト全体の遂行が円滑に進むように調整した。

（３）成果

≪医療・ヘルスケア領域の歴史的 ELSI 研究グループ≫（歴史研究 G）

実施項目：（1）対象とする資料収集の遂行、アーカイブズ構築、HP での公開

- アーカイブズ収集成果

  ○PAB 団体等からの貸借資料（スキャンなど進行中）　**計約 660 点**

- 手をつなぐ育成会『手をつなぐ』　⇒約 100 冊
- スモンの会『曙光』　⇒約 400 部
- 川崎市社会復帰センター誌　⇒約 60 冊
- やどかりの里『爽風』など　⇒約 50 冊
- 和歌山県精神保健福祉センター旧機関紙　⇒約 50 点

など。その他多数。

学会イベント

第 36 回日本生命倫理学会年次大会

大会企画シンポジウム「公共文書としてのヘルスケア・アーカイブスのデジタル化と生命倫理」

オーガナイザー：後藤基行（立命館大学）

シンポジスト：

福島幸宏（慶應義塾大学）「ヘルスケア・アーカイブズを「公共文書」として考える」

増田一世（やどかりの里）「障害福祉の実践現場で記録・資料をどう残し、未来に生かすのか」

久保田明子（広島大学）「原爆被爆に関する医療記録・研究資料の状況：「何で名前隠すん？」への答えとは」

指定質問：松原洋子（立命館大学）

HP での公開

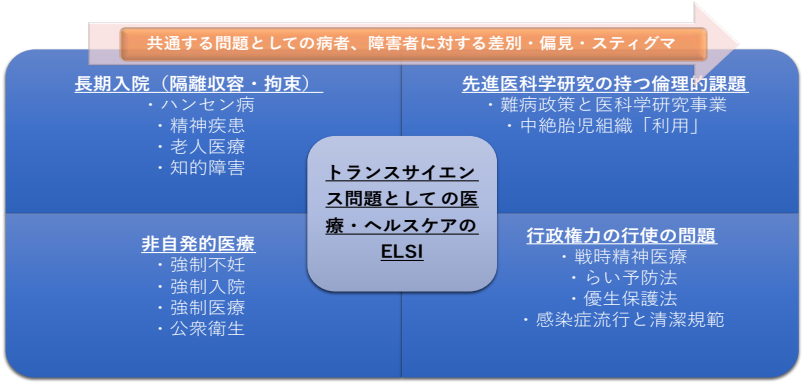
「医療・ヘルスケア政策データアーカイブ」https://jmhp-data-archive.com/

のデータ更新を行った。

実施項目：（2）個別研究の遂行

成果：個別研究との遂行や、研究者らの収集するアーカイブズなどから各領域における歴史的 ELSI の概念図（下記）を提起し、より洗練させていくことが可能だと考えられるようになってきた。

医療・ヘルスケア領域の歴史的ELSIの概念図



実施項目：（3）PAB とのワークショップにおいて議論の対象とする資料の選定、患者・当事者・市民からの意見や批判の吟味と自身の研究へのフィードバックの検討

成果①：2024 年 12 月 8 日ワークショップ
国立療養所長島愛生園に保管されている一次資料として、１９５０年代のハンセン病療養所における「未感染児童」と呼ばれた学童に関する一次資料が議論の対象に選定され、議論を行った。当時、子供がいるハンセン病患者で療養所に入所する場合、養育が困難になることが想定されるため、子連れで入所することが多かったが、患者は母親であることが過半だった。すなわち、養育の社会的責任が女性に課されているジェンダーギャップがあり、これに伴い児童もハンセン病療養所への隔離が強いられていたことの問題が指摘されるなどした。

成果②：2025 年 2 月 16 日
5 万ショット以上のファイルから、優生保護法下において強制不妊手術の実施の可否を審査する優生保護審査会に関わる公文書を選定し議論を行った。公開された公文書には黒塗りが非常に多く、重要な内容自体に黒塗りがなされること自体の問題点が広く指摘されたほか、当時の議論が非常にずさんな面があったことなどが明らかとなり、ヘルスケアアーカイブズをめぐる ELSI についての理解が参加者に共有されたと考えられる。

≪患者・市民参画型システム構築グループ≫（PPIG）

実施項目：（1）PAB（患者・市民アドバイザリーボード）を通じた ELSI 課題の検討と提言

成果：昨年度に引き続き、歴史研究グループと連携して患者・市民参加型ワークショップを 2 回開催し、個別研究への ELSI の提言を行うというプロセスを着実に積み重ねている。オンラインでの方法も含め、対話型ワークショップを通じて得られた ELSI の視点について、各研究者にフィードバックシートを作成してもらうとともに、来年度以降のウェブサイトを通じた情報発信へ繋げていく予定である。

実施項目：（2）ヘルスケアアーカイブズ構築の ELSI 課題に関する調査

成果： 意識調査の実施と分析を通じて、一般市民がアーカイブズの利活用に対して抱いている懸念や期待に関する認識の基礎的なデータを得ることができた。結果については研究成果として論文化を進めるとともに、来年度実施する予定の FGI（フォーカスグループインタビュー）の設計に連関させ、量的・質的双方の統合的な分析を行い、実施項目（３）の検討の基盤的なデータとする。

実施項目：（3）ヘルスケアアーカイブズに必要な倫理的配慮の方向性の検討

成果： 意見交換会を通じて研究グループ内での倫理的配慮の方向性についてコンセンサスを醸成する機会を持った。また、R7 年度に検討する倫理的配慮に必要な基本的方針の素案について、PPI グループの研究者の間で議論と検討を行った。

≪ELSI に関わる総合的検討グループ≫（総合的検討 G）

実施項目：勉強会の実施

成果：外部からの講師や赤司メンバーによる報告を行ったことにより、海外の医療情報の管理体制や問題発生事案を知ることができた他、九大における先進的な医療情報の公開の試みの知見が得られた。

実施項目：歴史研究 G、PPIG の活動のクオリティコントロール

成果：歴史研究 G や PPIG の個別課題に対しての軌道修正がなされたり、資料収集において人的ネットワークを駆使した環境調整により資料収集が進んだ。松原メンバーや竹島メンバーからはワークショップにおいて管理者側、あるいは政策遂行側の理屈にも十分に意識的である必要性が指摘され、人文社会系メンバーが多い本プロジェクトにあって、ELSI の考察が糾弾型にならない重要性についての理解が進んだ。

（４）当該年度の成果の総括・次年度に向けた課題

・【アーカイブズ収集】立命館大学のプロジェクト室を中核としたアーカイブズ収集は、雇用研究員や RA、アルバイト、研究補助員らの活躍により順調に進んだ。
・【アーカイブズ収集】R5 年度はアーカイブズ収集の方にウェイトがかかった活動となった一方で、HP を中心にした公開は公文書に関するデータ公開方針は一筋縄ではいかない点が多く、滞った。
・【資料選定と PPI／ワークショップからの研究へのフィードバック】ワークショップにおけるディスカッションそのものは盛り上がる一方で、研究へのフィードバックをどのように具体的に行うかについては課題が指摘された。
・【ワークショップの運営】R6 年度はオンラインでもワークショップを運営し、対面と遜色ない相互作用と効果を得られる手法の検討を行った。事後アンケート等でも概ね良い評価を得ており、来年度はオンラインでの実施回数を増やすことを想定する。
・【倫理的配慮の方針】最終年度以降の展開として、この成果を具体的に各アーカイブズでの利活用審査のあり方に実装していく道筋を検討する。まずは、立命館での生存学アーカイブズの利活用審査の仕組みの検討に活かすことを前提に、さまざまな機関で広く参考となるような原則的な文案の方向性を検討していく。

・【総合的検討グループ】PAB 研修は参加者からの事後評価は高くうまくいったと考えられる。今後も継続して外部からの講師も呼ぶことでよりよい成果につながることが期待される。

俯瞰・統合した結果分かったこと

本プロジェクトの要諦は PPI を通じた歴史研究 G への意見・批判と、そのフィードバックであったが、申請書執筆段階においては実験的な要素もある本企画が機能するかが不透明だった。しかし、これまでに実施したワークショップにより、本企画が期待以上の成果をあげうることが判明したため、本プロジェクトのみならず多様なステークホルダーと共同関係を人文社会系研究者グループが構築し、PPI を実践していくことが当該領域のブレイクスルーにつながることが期待される。

次年度に向けての課題とその解決方法の検討

R6 年度におけるアーカイブズ構築においては、公文書館などの現地への訪問が必要な資料において十分な収集ができなかった。これは主に調査先に対する資料請求の詳細を詰める作業が滞ったためである。R７年度においては準備期間をプロジェクト側、調査先においても長くとり、余裕を持った対応を行う。

PPI 参加を行ったうえでの対面ありのワークショップは、議論のやりやすさや協働関係の構築のしやすさという面で効果が大きいが、やはり開催準備の負担が大きいため、R６年度にも実施したオンラインでの開催を増やす予定である。

２－２．実施内容・結果

年月日	名称	場所	概要
2024/4/10	定例ミーティング	ZOOM	昨年度の振り返りと到達点の確認共有
2024/5/18	定例ミーティング	ZOOM	サイトビジットをふまえた本班の反省点共有
2024/5/24	定例ミーティング	ZOOM	本年度のマイルストーンの全体確認
2024/6/12	定例ミーティング	ZOOM	本年度のワークショップ及び研究会の計画策定
2024/7/10	定例ミーティング	ZOOM	班内研修（9/28）の予定と講師の選定

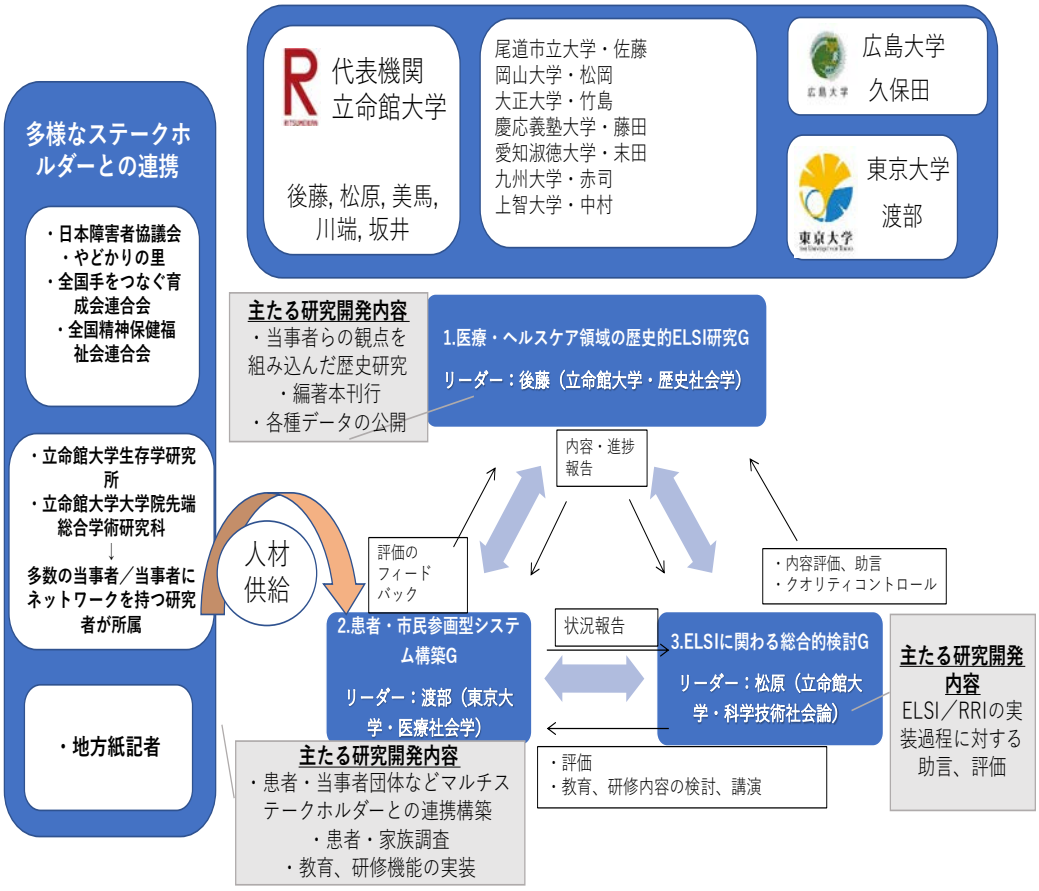
2024/7/25	定例ミーティング	ZOOM	班員の資料収集状況の確認と進捗管理
2024/9/11	定例ミーティング	ZOOM	班内研修（9/28）の事前打合せ①
2024/9/26	定例ミーティング	ZOOM	班内研修（9/28）の事前打合せ②
2024/10/9	定例ミーティング	ZOOM	班内研修の振り返りと成果の共有
2024/11/13	定例ミーティング	ZOOM	合同ワークショップ（12/8）の趣旨確認
2024/11/14	定例ミーティング	ZOOM	合同ワークショップ（12/8）の資料選定
2024/12/11	定例ミーティング	ZOOM	合同ワークショップの振り返り
2025/1/15	定例ミーティング	ZOOM	年度末ワークショップ（2/16）の趣旨確認
2025/1/16	定例ミーティング	ZOOM	年度末ワークショップ（2/16）の資料選定
2025/2/12	定例ミーティング	ZOOM	年度末ワークショップの振り返り
2025/3/12	定例ミーティング	ZOOM	本年度の振り返りと次年度のマイルストーン確認

３．研究開発成果の活用・展開に向けた状況

PPI を通じた一次資料の協働での読み解きとディスカッションは、歴史研究における先進的かつ社会との対話を通じた資料検討方法として展開可能であることが立証されつつあると考えられる。同様の企画は、現在進行中の他の大型研究プロジェクトにおいても採用される予定であり、今後類似の歴史研究その他においても波及していくことが期待できる。

２５年度に完成する予定である、PPI を通じたヘルスケアアーカイブズに関する倫理的配慮の方針を、まずは立命館大学生存学研究所が収集してきた資料群に対して適用することが検討予定である他、同様の資料群を保持する他機関においても参考可能になることが想定される。

4．研究開発実施体制


代表機関
立命館大学
後藤, 松原, 美馬,
川端, 坂井
尾道市立大学・佐藤
岡山大学・松岡
大正大学・竹島
慶応義塾大学・藤田
愛知淑徳大学・末田
九州大学・赤司
上智大学・中村
広島大学
久保田
東京大学
渡部
多様なステークホルダーとの連携
・日本障害者協議会
・やどかりの里
・全国手をつなぐ育成会連合会
・全国精神保健福祉会連合会
・立命館大学生存学研究所
・立命館大学大学院先端総合学術研究科
↓
多数の当事者／当事者にネットワークを持つ研究者が所属
・地方紙記者
人材供給
主たる研究開発内容
・当事者らの観点を組み込んだ歴史研究
・編著本刊行
・各種データの公開
1.医療・ヘルスケア領域の歴史的ELSI研究G
リーダー：後藤（立命館大学・歴史社会学）
内容・進捗報告
評価のフィードバック
・内容評価、助言
・クオリティコントロール
2.患者・市民参画型システム構築G
リーダー：渡部（東京大学・医療社会学）
状況報告
3.ELSIに関わる総合的検討G
リーダー：松原（立命館大学・科学技術社会論）
主たる研究開発内容
ELSI／RRIの実装過程に対する助言、評価
主たる研究開発内容
・患者・当事者団体などマルチステークホルダーとの連携構築
・患者・家族調査
・教育、研修機能の実装
・評価
・教育、研修内容の検討、講演

５．研究開発実施者

≪医療・ヘルスケア領域の歴史的 ELSI 研究グループ≫（歴史研究 G）（リーダー氏名：後藤　基行）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職（身分）
後藤　基行	ゴトウ モトユキ	立命館大学	大学院先端総合学術研究科	准教授
佐藤（高間）　沙織	サトウ サオリ	尾道市立大学	経済情報学部	准教授
渡部 沙織	ワタナベ サオリ	東京大学	医科学研究所公共政策研究分野	特任研究員
松原 洋子	マツバラ ヨウコ	立命館大学	大学院先端総合学術研究科	教授
川端 美季	カワバタ ミキ	立命館大学	衣笠総合研究機構	准教授
中村　江里	ナカムラ エリ	広島大学	大学院人間社会科学研究科	准教授
松岡　弘之	マツオカ ヒロユキ	岡山大学	大学院社会文化科学研究科	准教授
坂井めぐみ	サカイ メグミ	立命館大学	衣笠総合研究機構	専門研究員
末田 邦子	スエダ クニコ	愛知淑徳大学	福祉貢献学部	准教授
今井 浩登	イマイ ヒロト	立命館大学	大学院先端総合学術研究科	博士課程院生
吉田　光	ヨシダ ヒカル	立命館大学	大学院先端総合学術研究科	修士課程院生

≪患者・市民参画型システム構築グループ≫（PPIG）（リーダー氏名：渡部 沙織）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 （身分）
渡部 沙織	ワタナベ サオリ	東京大学	医科学研究所 公共政策研究 分野	特任研究員
赤司 友徳	アカシ トモノリ	九州大学	大学文書館	准教授
久保田 明子	クボタ アキコ	広島大学	原爆放射線医科学研究所 附属被ばく資料調査解析部	助教
坂井めぐみ	サカイ メグミ	立命館大学	衣笠総合研究機構	専門研究員
利光 恵子	トシミツ ケイコ	立命館大学	生存学研究所	客員研究員
谷田 朋美	タニダ トモミ	毎日新聞社／CFS（慢性疲労症候群・筋痛性脳脊髄炎）支援ネットワーク／立命館大学	大阪本社編集局 生存学研究所	記者 理事 客員研究員

≪ELSI に関わる総合的検討グループ≫（（総合的検討 G）（リーダー氏名：松原 洋子）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 （身分）
松原 洋子	マツバラ ヨウコ	立命館大学	大学院先端総合学術研究科	教授
美馬 達哉	ミマ タツヤ	立命館大学	大学院先端総合学術研究科	教授

竹島　正	タケシマ タダシ	大正大学	地域構想研究所	客員教授
藤田 卓仙	フジタ タカノリ	慶應義塾大学	医学部 医療政策・管理学教室	特任准教授

６．研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

６－１．シンポジウム等

年月日	名称	主催者	場所	参加人数	概要
2024年９月28日	R6 年度全体班会議	立命館大学 JST/RISTEX プロジェクト	立命館大学朱雀キャンパス	15	井上悠輔（京都大学大学院医学研究科）「「医療・ヘルスケアアーカイブズのあり方に関する意見交換会」―少し前の医療記録・コミュニティ資料をめぐる研究倫理」 赤司友徳（九州大学大学文書館）「九州大学大学文書館における医療アーカイブズの公開に関する試論」
2024年12月８日	立命館大学 JST/RISTEX プロジェクト 【患者・市民参画型ワークショップ】医科学の歴史における ELSI：ハンセン病療養所に関わる一次資料の検討	立命館大学 JST/RISTEX プロジェクト	オンライン	23	国立療養所長島愛生園に保管されている一次資料として、１９５０年代のハンセン病療養所における「未感染児童」と呼ばれた学童に関する一次資料が議論の対象に選定され、議論を行った。
2025年２月16日	立命館大学 JST/RISTEX プロジェクト 【患者・市民参画型ワークショップ】医科学の歴史における ELSI：優生保護法に関わる一次資料の検討	立命館大学 JST/RISTEX プロジェクト	立命館大学大阪いばらきキャンパス	30	優生保護法下において強制不妊手術の実施の可否を審査する優生保護審査会に関わる公文書を選定し議論を行った。

６－２．社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

（１）書籍、フリーペーパー、DVD

・後藤基行『我が国の精神保健福祉（令和６年度版）　精神保健福祉ハンドブック』（担当:分担執筆，範囲:後藤基行「第２章 精神保健福祉行政の経緯」、日本公衆衛生協会、2025 年
・後藤基行「ライシャワー事件が精神医療政策へ与えた影響は大きかったのか？」『公衆衛生情報』54(12)、12-14 頁、2025 年
・後藤基行「「旧優生保護法」― 医療・福祉の中の人権侵害」『月刊金融ジャーナル』65(10)、34-35 頁、2024 年
・後藤基行「優生保護法違憲判決と強制不妊手術関係資料の廃棄・黒塗り・アクセス困難問題－ヘルスケアアーカイブズの保存と利活用に向けて」『響き合う街で』（110)、28-38 頁、2024 年
・松岡弘之「解説：小川正子とその時代」（小川正子『小島の春』河出書房新社、2024 年、316-321 頁）
・竹島正「自殺対策における自治体職員のあり方　協働型の地域自殺対策と自治体：持続可能なまちづくりへのアプローチ」（公益財団法人日本都市センター『「都市自治体の自殺対策のあり方に関する調査研究」報告書』、2024 年、141-164 頁）
・美馬達哉『臨床と生政治：〈医〉の社会学』（青土社、2024 年）
・赤司友徳・後藤基行・増田一世「鼎談　記録・資料を未来に生かす　ヘルスケアアーカイブズのこれから」『響き合う街で』第 110 号、2025 年

（２）ウェブメディアの開設・運営

・（後藤基行）「医療・ヘルスケア政策データアーカイブ」
https://jmhp-data-archive.com/
2021 年 3 月開設

（３）学会（6-4.参照）以外のシンポジウム等への招聘講演実施等

・Motoyuki GOTO, Issues in the Preservation and Accessibility of Healthcare Archives, Eugenics and Justice in East Asia: Past and Present, Ritsumeikan University Suzaku Campus, Kyoto, 2025 年 2 月 24 日
・Motoyuki GOTO, The Actual Implementation of Forced Sterilization Under the Eugenic Protection Law in Japan, Eugenics and Justice in East Asia: Past and Present, Ritsumeikan University Suzaku Campus, Kyoto, 2025 年 2 月 22 日
・後藤基行「精神医療史から精神科病院の長期入院問題を考える」、全日本自治団体労働組合地域保健・精神保健セミナー、東京（TOC 有明）、2024 年 12 月 14 日

・後藤基行「資料の中の強制不妊手術―医療機関作成資料と公文書―」全国精神保健福祉連絡協議会令和６年度総会、オンライン、2024 年 7 月 23 日
・松岡弘之「太田正雄（木下杢太郎）のハンセン病研究について」、ハンセン病資料館友の会講演会、国立ハンセン病資料館、2025 年 2 月 23 日
・松岡弘之「小川正子とその時代：近代日本のハンセン病政策と臨床医、いま『小島の春』を読むということ」、スロウな本屋、2025 年 1 月 26 日
・松岡弘之「ハンセン病関係資料の収集・保存・活用：その課題と可能性、熊本で考えるハンセン病資料」、熊本大学文書館、2024 年 12 月 21 日
・松岡弘之「わたしたち」のハンセン病問題：長島における「自治」の射程」、長島愛生園フィールドワーク・ワークショップ、国立療養所長島愛生園、2024 年 10 月 5 日
・竹島正「共生社会と精神保健-精神医療への期待」、多摩あおば病院院内講演会、2024 年 4 月 22 日
・Naoko Kawaguchi, Megumi SAKAI, Noriko Seyama, and Keiko Toshimitsu, "Findings from interviews with victims of forced sterilisation and other medical procedures on the grounds of disability," ‘Eugenics and Justice in East Asia: Past and Present’ 23 February 2025,
・坂井めぐみ・河口尚子・瀬山紀子・利光惠子「優生保護法下における障害を理由とした不妊手術等を受けた被害者へのインタビュー調査から見えてきたこと」、ミニシンポジウム「「人口」管理の科学：優生学、精神衛生、結核」、2025 年 1 月 23 日
・赤司友徳「「久保記念館の蔵書、文書資料：2018-2020 年の調査報告から」、書物同好者の相談并ニ懇談会第十八回、2024 年 12 月 21 日、九州大学病院キャンパス
・赤司友徳「医療ヘルスケアアーカイブズの保存と利活用について」、シンポジウム「接続する人文学」〈図書館、文書館と研究データ〉、2024 年 12 月 24 日、九州大学

６－３．論文発表

（１）査読付き（ 3 件）

●国内誌（ 1 件）

・末田邦子「昭和戦前期の方面委員の精神病者へ活動展開」『愛知淑徳大学福祉貢献学部論集』第 15 号、2025 年、44-55 頁

●国際誌（ 2 件）

・Yukitaka Kiya, Saori Watanabe, Kana Harada, Hideki Yui, Yoshimi Yashiro, Kaori Muto, “Attitudes of patients with IVF/ICSI toward human embryo in vitro culture beyond 14 days,” *Regenerative Therapy,* vol. 26, pp.831-836, June 2024

・Hideki Yui, Yoshimi Yashiro, Kaori Muto, Saori Watanabe, Yukitaka Kiya, Yusuke Inoue, Zentaro Yamagata, “Opinions on research involving human embryo models by researchers and the general public,” *Regenerative Therapy*, vol. 26, pp.9-13, June 2024

（２）査読なし（ 15 件）

・後藤基行「近現代日本における精神医療供給構造の歴史社会学」北田暁大，岸政彦，筒井淳也，丸山里美，山根純佳，前田拓也編『岩波講座 社会学 第８巻（医療・ケア・障害）』岩波書店、2025 年３月
・松岡弘之・森田竹次「「隣組長会控帖」について：戦後長島愛生園の不自由者たち」『岡山大学文学部紀要』77 号、2024 年
・松岡弘之「「愛生保育所」運営記録にみる「未感染児童」の処遇」『日本ハンセン病学会雑誌』93 巻１号、2024 年
・竹島正「自殺の疫学と自殺予防：公的データの質は改善されているのか」『こころと文化』、23 巻１号、2025 年、44-53 頁
・Tadashi Takeshima, "Long-Term Impact of World War II on Suicide in Japan," *New England Journal of Public Policy*, Vol. 36: Issue. 2, 2024
・Takeshima T, “Current Status of Suicide Prevention in Japan from A Historical Viewpoint.” *Journal of Suicidology,* Vol. 19 No. 1, 2024
・竹島正「自殺予防・自死遺族支援からみた過労死・過労自殺の予防」『過労死防止学会誌』、4 号、2024 年、26-31 頁
・竹島正「自殺対策二法の改正・統合を望む」『自殺予防と危機介入』、44 巻２号、2024 年、66-68 頁
・竹島正・山内貴史・井上顕・福永龍繁「自殺の統計の健全な発展を願う：2022 年警察庁自殺統計原票の見直しを踏まえての提案」『自殺予防と危機介入』、44 巻１号、2024 年、114-116 頁
・竹島正「宗教者災害支援の活動に学ぶ」『公益社団法人日本精神保健福祉連盟広報誌』50 号、2024 年、26-29 頁
・河野稔明・竹島正「第 80 回精神保健シンポジウムを企画して」『心と社会』50 巻４号、2024 年、9-11 頁
・美馬達哉「グローバルリスク時代の否定論とポストトゥルース：戦略としての無知」（『グローバルリスク・ダイナミクス』晃洋書房、2025 年）
・美馬達哉「医療化のレトリック」（岸政彦・山根純佳・前田卓也編『岩波講座　社会学　８　医療・ケア・障害』岩波書店、2025 年、187-215 頁）
・美馬達哉「COVID-19 パンデミックと無知」（鶴田想人・塚原東吾編著『無知学への招待：〈知らないこと〉を問い直す』明石書店、2025 年、299-305 頁）

・赤司友徳「戦前期における医療記録の管理制度：医師の自律と保健行政の統制」『九州史学』198 号、2024 年 7 月、59-83 頁

６－４．口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）

（１）招待講演（国内会議　2　件、国際会議　3　件）

・Motoyuki GOTO, “The Difficulty of Psychiatric Deinstitutionalization in Japan-Historical Analysis of the Beds Supply” 2024 East Asia Disability Studies Forum in Taiwan, Chang Yung-Fa Foundation International Conference Center, 25 October 2024.

・坂井めぐみ「「患者・市民参画」における患者：制度化以前の患者団体の関与を手がかりに」、日本科学史学会総会第 71 回年会、東京大学駒場キャンパス、2024 年 5 月 26 日

・Tatsuya MIMA “The Impact of the COVID-19 Pandemic on the Lives of Ventilator Users: Ethical Considerations,” Pandemic ELSI International Conference, Kyoto JAPAN, 13-15th Mar. 2025.

・Tatsuya MIMA ”COVID-19 Experiences of Ventilator Users,” 臺灣社會學會年會, 中山医学大学, 23th Nov, 2024

・美馬達哉「医療社会学からみたピアと医療専門家の関わり方」ワークショップ「患者・市民参画（PPI）とは何か：その現状と課題」、日本医学哲学倫理学会大会、滋賀医大、2024 年 11 月 2 日

（２）口頭発表（国内会議　7　件、国際会議　0　件）

・後藤基行「公共文書としてのヘルスケア・アーカイブズのデジタル化と生命倫理」、第 35 回日本生命倫理学会（年次大会大会企画シンポジウム）、立命館大学大阪いばらきキャンパス、2024 年 11 月 17 日

・後藤基行「多様なステークホルダーとの協働による新しい資料読解の試みとアーカイブズの公共化」、第 35 回日本生命倫理学会、立命館大学大阪いばらきキャンパス、2024 年 11 月 16 日

・松岡弘之「「愛生保育所」運営記録にみる「未感染児童」の処遇」、第 97 回日本ハンセン病学会総会・学術大会、国立療養所邑久光明園、2024 年 6 月 13 日

・石井美緒、福井英理子、柴崎聡子、竹島正「在留外国人のメンタルヘルスクライシス：川崎市精神科救急と退院後支援の利用実態から」、第 43 回日本社会精神医学会シンポジウム 7「わが国の在留外国人のメンタルヘルスーその課題と展望－」、2025 年 3 月 14 日

・竹島正「学び合う空間づくり：メディアカンファレンスについて」、シンポジウム６「自殺予防のためのメディア表現とは」第 48 回日本自殺予防学会、2024 年 9 月 15 日
・竹島正「ワークショップ１「自殺対策の 20 年を振り返り、これからの 20 年を考える」、第 48 回日本自殺予防学会、2024 年 9 月 14 日
・竹島正、河野稔明、辻本哲士、籠本孝雄、阿部俊幸、宇佐美寿江、喜多村祐里、島田達洋、楯林英晴、中川浩二、西畑陽介、田中治：自殺対策の地域力に関する調査．第 120 回日本精神神経学会（札幌）、2024 年 6 月 20 日
・坂井めぐみ（立命館大学）・高森裕司・尾上敬子・中嶋宇月・利光惠子・河口尚子、「優生保護法下で聴覚障害のある人に行われた強制的な不妊手術：弁護士、被害者、支援者、研究者の視点から」、第 36 回日本生命倫理学会年次大会、立命館大学茨木キャンパスキャンパス、2024 年 11 月 16 日

（３）ポスター発表（国内会議 1 件、国際会議＿＿件）

・坂井めぐみ・河口尚子・瀬山紀子・利光惠子、障害学会第 21 回大会、障害を理由とした不妊手術等を受けた被害者へのインタビュー調査から見えてきたこと、東京理科大学葛飾キャンパス、2024 年 9 月 14 日

６－５．新聞／TV 報道・投稿、受賞等

（１）新聞報道・投稿（ 4 件）

・坂井めぐみ、京都新聞、「現代のことば 倒れそうで倒れない」、2025 年 2 月 18 日
・坂井めぐみ、京都新聞、「現代のことば 移動アクセシビリティ」、2024 年 12 月 5 日
・坂井めぐみ、京都新聞、「現代のことば わたしの娘はヤングケアラーに？」、2024 年 9 月 30 日
・坂井めぐみ、京都新聞、「現代のことば 祇園祭と、車椅子と、」2024 年 7 月 29 日

（２）受賞（＿＿件）

該当なし

（３）その他（＿＿件）

該当なし

６－６．知財出願

（１）国内出願（　0　件）
該当なし
（２）海外出願（　0　件）
該当なし